

政府のクーデター — 松尾正人『廃藩置県』—

私は「都道府県廃止し、道州制導入と首都移転が必要」と考えている。百五十年前に実施された「廃藩置県」は、未だに行政基本基準。廃藩置県は明治維新における政府第二クーデターとも言うべき内容で、これによって中央集権官僚国家への道が開かれた。(菊地実)

近代国家への道

政府／権力者側がクーデターを起こすこともある。1851年ルイ・ナポレオン大統領がクーデターを起こして議会を解散、国民投票を経て皇帝となったのが代表例。現在進行中のトランプ喜劇もそれに近い? 最近、鎌倉幕府成立年代が我々が習った年表と違うことを知った。歴史家解釈も時代によって変わる。

明治維新は二条城での大政奉還(慶應三年十月／1867年11月10日)、五箇条の御誓文(慶應四年三月十四日／1868年4月6日)、明治天皇即位の礼(慶應四年八月二十七日／1868年10月12日)、明治に改元(慶應四年九月八日／1868年10月23日)、そしてその後の戊辰戦争と、幾つもの段階がある。今回紹介する廃藩置県は、約七百年間続いた封建時代を終わらせた制度革命である。

金欠病

十九世紀、多くの藩は金欠病に喘いでいた。幕末開港でインフレが進み、ほとんど御用商人頼みの小藩も少なからず。大藩とて幕末戦争で洋船購入・小銃購入と何かと物入り。戊辰戦争後の幕府・東北諸藩領地の召し上げで政府は約八百万石となつたものの、全国の1/4程度。新政府は各藩がせっせとこさえた賡金・偽札回収と租税一本化でお忙しい。近代国家になるには、中央集権・租税体系を一本化することが急務。

まず明治四年、鹿児島・山口・高知三藩の軍隊八千人を近衛親兵として東京に集め、軍權を確立。新政府



<中公新書>

に出仕している新役人にとって租税徵収・国民皆兵といった近代化の為には藩解体が必須と認識され始めた。そして様々な根回しを経て、いよいよ廃藩置県が。

廃藩置県の申し渡し

本書を読んでいると木戸孝允の果たした役割の大きさに気づく。維新三傑の中で最も進歩的であり目立たないが、見通しの良さはさすがである。木戸から大久保、そして西郷という根回しが進む。すでに南部藩や小藩のように自ら廃藩を申し出た藩も出ていた。

そして明治四(1871)年7月14日、廃藩置県が申し渡された。「明治天皇出御、三条実美が勅語を宣した。藩を廢して県を置く」(164頁要約)。申し渡しは<図表>のように、大きく三段階に分かれていた。まず維新の原動力となった「薩・長・土・肥(鹿児島・山口・高知・佐賀)」がお呼ばれ。これが後の藩閥。次は、比較的早く朝廷側についた有力四藩「名古屋・熊本・鳥取・徳島」を呼ぶ。この八大藩の百五十年後を見ると、トヨタ中心

に発展している名古屋と半導体フィーバー熊本を除くと、いずれも過疎人口減が著しい。特に佐賀・鳥取・徳島をどう見るべきだろうか。

無論、島津久光のように大反対派もいた。「久光は＜鯨海醉侯＞と称された山内容堂のように風流と放蕩に浸ることで鬱憤を晴らす人物ではなかった。鍋島閑叟のような寛容と退廻に隠棲する瘦身白骨の老人でもない」(172頁要約)。久光が屋敷内で花火を打ち上げたことは、司馬遼太郎小説でも特筆されている。

舞台を見るような

「廃藩置県の断行は、維新の変革と改革が緩やかだった地方の城下町では、まさに晴天の霹靂であった」(173頁)として、福井滞在中の雇い教師アメリカ人ウイリアム・グリフィス著書から引用している^{*1}。グリフィス自身は「働かない役人と穀潰しが多すぎるのを日本最大の弊害と見做し、両手を上げて歓迎」(174頁)し、「廃藩置県の衝撃は、一時多くの武士を仰天させたが…急速に鎮静化…福井藩は王政復古のクーデターにも加わり…前藩主や由利公正・青山貞が政府出仕…」(175頁)。

ドラマチックなのは旧藩主と藩士の別れ。歌舞伎や昔の東映オールスター時代劇のような場面！「十月一日、福井城大広間。襖が全て取り外され、絆をつけた2460余人の旧藩士が並んでいた…一人一人の表情が遠くを見つめているように思えた」(176頁要約)、「十月二日、旧藩主／前知事が福井出立。町中が大騒ぎ。数千人が集まり、多くの老人・女・子供が泣いている…福井の街は大きく変わっていく。旧藩の身分高い役人はほとんど政府出仕…その年の暮、700世帯以上が福井を離れたと聞く…廃藩置県は、多くの城下町を変貌あるいは衰退させ、福井もまたそのような

<図表>明治4年の廃藩置県申し渡しの順序

○7月14日 午前10時に招集

鹿児島藩知事	島津 忠義
山口藩知事	毛利 元徳
佐賀藩知事	鍋島 直次
高知藩知事	山内 豊範(代理:板垣退助)

○同日 その後の招集

名古屋藩知事	徳川 慶勝
熊本藩知事	細川 護久
鳥取藩知事	池田 慶徳
徳島県知事	蜂須賀 茂韶

○7月15日の招集

在国、二百藩の知事及び代理

(本書より)

地方都市になった」(178-179頁)とある。

近代化の光と影

江戸期に三百近い城下町と交通路にできた宿場町・物流拠点となった湊町で、日本も都市化が進んだ。中には産業拠点としての織物街、漁港も発展した。江戸期はある意味で分権的だったものの、明治維新は中央集権でその後の鉄道・通信・産業の発展と郡県制は日本を大きく変えた。東京・大阪のように発展する街と停滞した町、さらに新しい産業都市も成立していった。廃藩置県と県庁所在地を見ると、やはり県庁所在地はそれなりに発展し、その他は衰退する例が多い(新潟・高田、宇都宮・栃木、長野・松本、富山・高岡、山形・米沢etc…。

維新原動力の薩・長・肥で反乱が起り、土佐も自由民権反政府になる革命と反革命の力学も面白い。巻末にある「廃藩置県後の府県沿革」も便利で、どこも糺余曲折があり、なかなか一筋縄でいかなかつた(特に複数大名がいた所)ことが分かる。

本書は文章がよく、読みやすい歴史書である。

*1:『明治日本体験記』エリオット・グリフィス著・山下栄一訳、平凡社「東洋文庫」、1984年発行

■筆者/ 松尾正人(マツオ マサヒト)、1948年東京生まれ。1976年中央大学大学院博士課程修了。東海大学助教授。中央大学教授、中央大学副学長。

■書誌/ 中公新書、昭和61(1986)年発行。新書判・247頁。